

はじめに (未定稿)

少し前に、終活に向けて家の整理をしていたら、20年以上前の手書きのレポートがいくつか見つかった。内容は、beam loading (注)、waveguide の反射、beam monitor の解析等に関するものである。昔はこんなことを書いていたのかと新発見をしたが、少し復習しないと内容が理解できそうもない。また、手書きのレポートをパソコン入力してみるのも悪くないかとも思ったが、ページ数、特に式がかなり多いので、時間がかかりそうなのと、もしかしたら内容は当時でも取り立てて新しいものでなく、今では当然、陳腐化しているかもしれないと思い、そのまま放ってある。

しかし、これら手書きのレポートの詳細はよくわからないでも、基本的な考えの多くは、等価回路に基づくものである。そこで、以下の「内容の概要」に列挙したような項目について、若干の考察をしたものの方がむしろおもしろい、役に立つのではないかと、文章化を試みることにした。

なお、筆者は、回路や電気工学等については、全くの素人で、少しばかり独学した程度であるので、回路の設計や製作については、「普通の」大学生レベルを超えていないであろう。また、以下の内容は、専門家から見たら、全く当たり前のことで、内容によっては間違っているかもしれない。よって、この点は事前にお断りしておかなければならないが、それでも、いくつかの点について、おもしろいと思っていただけるものがあれば幸いである。

(注) 加速器関係者への参考文献： 最近では、beam loading に関して、もっと優れた解説があるかもしれないが、個人的には、次の文献を是非、推奨したい（そのうち、復習したいと思っている）。

1. P. B. Wilson, "KEK LECTURES ON BEAM LOADING AND IMPEDANCE PROBLEMS IN e^+e^- STORAGE RINGS", KEK-ACCELERATOR-79-7, March 1980.

<https://lib-extopc.kek.jp/preprints/PDF/1979/7920/7920007.pdf>

(若干のミスプリがあるが、「それに余り有る」優れた解説であると思う)

2. P. B. Wilson, "Transient Beam Loading in Electron Positron Storage Rings", PEP-Note-276.

<https://www.osti.gov/servlets/purl/6401786>

または、同名のCERN-ISR-TH/78-23 (Rev.)

<https://cds.cern.ch/record/119634/files/cer-000030126.pdf>

(余分な注) J. C. Slater等が指摘しているように（多分、指摘するまでもなく）、マイクロ波は等価回路だけでは、解析したり、理解することはできないことは明らかであろう。よって、これを理解するためには、another worldに踏み入る必要がある。しかし、相当程度のことが等価回路または回路的な取り扱いで理解できる（場合によっては、この方がよくわかる）ということは念頭においておく必要があるであろう。

<内容の概要>

(0) 準備的注意

- ・虚数単位、phasor 表示、複素パワー、実効値

(I) Thevenin の定理、Norton の定理 (等価回路 (equivalent circuit))

- ・テブナン (Thevenin)、ノートン (Norton) に関する逸話の紹介
- ・テブナンの定理及びノートンの定理の証明
- ・定理の簡単な応用例

前者の初等的導出については、いろいろな文献にあるが、後者についてはあまり見当たらないようなので、両者を比較しつつ、初等的な説明をすることにする。なお、ここでは、これらの定理の回路への応用については、ほんの二例ほどを取り上げるのみであり、力学や波動、及びマイクロ波などの電磁波等々の他の分野への等価回路の適用については一切、触れていない。

<<以下の内容は、今後、付け加える予定のものであり、構成、内容も変わる可能性がある。>>

(II) Faraday の法則 (続)

これは、本ホームページに掲載した「ベクトル解析」の補遺の中の積分量の時間変化 (Faraday の電磁誘導の法則) に追記したものである。また、回路との関係で、自己&相互インダクタンスについても触れる予定である。

(III) キルヒホッフの法則 (Kirchhoff's laws, KCL & KVL)

- ・マクスウェル方程式とキルヒホッフの法則の関係、マクスウェルの悪魔 (?)

キルヒホッフの法則は、電気・電子工学の分野ではなくてはならない重要な法則であるが、物理の分野では、これを全く「無視」している (一切の記述がない) 有名な電磁気学の教科書がいくつかある。一方、当然のことながら、キルヒホッフの法則はマクスウェル方程式の近似として導かれるはずのものであり、その導出を述べた文献等もあるが、個人的には、若干、取り扱いが「不十分」であるような気がしている。そこで、この lecture note では、もう少しきちんと取り扱ってみることにしたい。そこではファラデーの法則 (電磁誘導の法則) がキーになるであろう。そして、マクスウェル方程式とキルヒホッフの法則の間にある「ギャップ」から、「マクスウェルの悪魔」と言ってもよいものが登場してくるのである (と、若干、大袈裟に言えるかもしれない)。とは言え、これは、何か新しいものではなく、日常的にあらゆるところに蔓延している、ノイズ (電磁ノイズ) 等のことを言い換えているに過ぎないのではあるが・・・

(IV) オイラー標数 (Euler characteristic)

・キルヒホッフの2つの法則 (KCL、KVL) だけで、回路問題は解けるか？

解けるに決まっているのに、馬鹿げた質問をするな！（実際に解けない問題を見たことがない！）と、言われそうではあるが・・・多くの方は、平面回路 (Planar circuit) の場合については、この馬鹿げた質問への回答を知っているであろう。しかし、3次元構造をもつ回路や素人が製作した空中配線、タコ足配線などの「複雑な回路」については、その回答は、？ではないだろうか。例えば、平面回路の場合には、「古典的な」オイラー標数を使って、答えが得られるが、「複雑な回路」では、そのままではうまくいかないであろう。しかし、このような「複雑な回路」についても、オイラー標数 (の考え方) を少し拡張することで、比較的容易に回答が得られるのである。本ホームページの目的である、「役に立つ」という観点からすると、この証明自体は、ほとんど何の役に立たないものかもしれない。しかしながら、若干、大袈裟な言い方をすれば、これは、「キルヒホッフの法則の無矛盾性の証明」と言ってもよいかもしれない。

(V) ポインティング・ベクトル (Poynting vector)

・
・
・

(VI) 相反定理、Tellegen の定理

・
・
・

(VII) 3相交流の超初歩

・
・
・

(VIII) パワー・フロー

・
・
・

等々・・・(?)